法教育委員会　委員　川崎　優太　（同志社香里高等学校 支援弁護士）

1　はじめに

この度、大山洸来弁護士、田頭拓也弁護士とともに同志社香里高等学校（以下、「同志社香里高校」といいます。）の支援弁護士をさせていただきました。

支援弁護士として活動するのは初めてで、高校生と関わるのは久しぶりでした。

支援活動の経過についてご報告したいと思います。

2　支援の様子

本連載を長年愛読していただいている会員であればご存知でしょうが、同志社香里高校は、高校生模擬裁判選手権を開始した当時から毎年のように出場する常連校です。

私が初めて支援に伺った時にまず驚いたのが参加者の人数です。写真からも分かるとおり、10人は軽く超える参加者がいました。上級生の中には昨年選手権に出場した生徒もおり、昨年の優秀賞に続いて今年も優勝を狙うぞと気合十分な様子。しかも、今年は4年ぶりのリアル開催ということで、尚更やる気に満ち溢れていたことでしょう。

経験豊富な上級生が下級生をうまく引っ張って準備は順調に進んでいきました……と言いたいところですが、こういうイベントあるあるで、中々準備は進みませんでした。チーム間のやり取りがうまく行かず、ブレインストーミングをぐるぐる続ける状況。情報の海に溺れていた生徒の様子があまりに可哀そうで、思わず私から「今日は終わりにして！」と準備を止めようとする始末でした。

それでも、生徒たちは昼夜問わず準備を続け、何とか尋問事項や論告・弁論を形にしていました（本番数日前ですが……）。

しかし、準備はこれだけでは終わりません。同志社香里高校名物の手作りボード作成が残っています。しかも、本格的な準備に取り掛かることができるのは、論告や弁論ができてからになるので、急ピッチで準備をすることになりました。なんと選手権当日になってもボードはできないという事態に……。選手権当日の朝、田頭弁護士の事務所で作業をしてようやく完成しました（田頭先生、ありがとうございました……）。

こんな感じで、ギリギリの準備になってしまいました。「本番は大丈夫だろうか……」という不安がよぎったというのが正直なところです。

3　選手権の様子

選手権本番も一つ問題が発生しました。生徒の一人が体調不良で当日参加ができなくなり、急遽編成を変えることに……。

欠席となってしまった生徒の思いも胸に、生徒たちは本番に臨みます。

本選が始まると、練習で見たことないほど堂々たる顔つきになり、最高の尋問を見せてくれました。予想していない回答がされても何食わぬ顔でリカバリーをし、反対尋問も証人・被告人を追い詰めていくプロ顔負けの進行を披露していました。

論告・弁論も、堂々と、ハキハキとした口ぶりで、ギリギリまで懸命に検討を重ねた論理展開を見せていました。論告・弁論の時に披露したボードも、当日の朝まで完成しなかったとは思えないほど完璧なものに仕上がっていました。

しかし、相手も手ごわい。特に、北野高校との一戦は、両者完璧な尋問、論告・弁論で、恐らく模擬裁判選手権関西大会史上最もハイレベルな戦いになったのではないでしょうか。

結果は北野高校が優勝、惜しくも同志社香里高校が準優勝となりました。生徒たちは複雑な表情をしていましたが、北野高校と力の差はほとんどありませんでした。間違いなく努力は報われたと思います。

なにより、選手権までの日々はこれからの人生にとってかけがえのないものになったのではないでしょうか。

4　おわりに

支援弁護士としての活動を通して、「自分にもこのような時期があったんだなぁ」と学生時代の青春を思い出していました。さらに、今回の活動を経て、「実際の裁判に行きたい」「弁護士を目指そうかな」と司法に対して興味を持つ生徒も現れたのは一弁護士としてうれしく思っております。

このような貴重な機会をいただき、誠にありがとうございました。